



教員と学生が担当する肺機能検査。「学生さんに会うと元気が出ます」と言う地元の人が多い。

「理想に向かう姿勢」もまた、人々を動かしたと村下教授は考える。

「ビッグデータを解析して病気の予兆を見つけ、予防につなげる。これはまさに最先端の研究です。しかし、『研究のための研究』では意味がない。研究によって地域の人の生活を変え、幸福にするから価値がある

### 社会が変わる姿を弘前で目にしよう

そして国立大学ならではの「理想に向かう姿勢」もまた、人々を動かしたと村下教授は考える。

「ビッグデータを解析して病気の予兆を見つけ、予防につなげる。これはまさに最先端の研究です。しかし、『研究のための研究』では意味がない。研究によって地域の人の生活を変え、幸福にするから価値がある



岩木健診を担う中路重之特任教授(右)と村下公一教授



# 弘前大学

Hirosaki University

ある学生は、子どもへの健康教育の重要性を実感する。ある学生は、同じペースで働く大手企業の社員から社会人としての姿勢を学ぶ。なかでも、医学部の学生には必須の「学びの場」だ

と中路特任教授は力説する。「医師になつてしまつと、彼らは日々『患者』としか向き合いません。でも、ここには『病気になる前の人』がいます。なぜ体に悪いと知つていてもお酒

やたばこをやめないのか。運動すべきなのにしないのか。その理由がここでならわかる。人の心をつかろうとしなければ、信頼される医師にはなりません」この研究は、「弘前大学でな

ければできなかった」と話すのは、弘前大学COI研究推進機構の村下公一教授だ。

「ビッグデータの中身は、極めてデリケートな個人情報です。それを地域の人から提供してもらえたのは、強い信頼関係があったからです。古くから地域に根を張ってきた弘前大学だからこそ、可能になったことだと思えます」

のです。最先端の研究と地道な活動、この二つがともにあるからこそ、企業も行政も地域も賛同してくれたのです」

時間はまだまだです。岩木健診で得たものを県内に広げていく、その道のりは遠い。

「けれど、青森は必ず変わります。本質的な健康を手に入れます。そんな社会の変革を目の当たりにしたいと願う学生に、弘前に来てほしい」(中路特任教授)

青森は日本一の「短命県」だ。男性は1985年から、女性は2000年から平均寿命全国最下位が続いている。

「短命県を返す上の一」その旗印を大きく掲げたのは弘前大学だった。中心となった同大学院社会医学講座・中路重之特任教授はこう話す。

「青森県は単に高齢者の寿命が短いだけでなく、40代50代の死亡率も高いのです。背景に

二千万項目の健康ビッグデータに世界が注目

そこで始まったのが「岩木健康増進プロジェクト」だ。12年前に岩木町(現・弘前市岩木地区)で始まった健康診断だ。だが、単なる健診とはわけが違ふ。20歳以上の岩木地区の住民約千人を対象に、生活習慣から遺伝子情報まで、とことん調べつく

ここまで詳細で大規模な健康調査は世界に類を見ない。小中学生の健康診断を含めると、現在までに延べ2万人に及ぶ「健康ビッグデータ」が蓄積され、その解析によって「動脈硬化と

アルコールや喫煙の関係」「軽度認知障害への関連因子」など、多数の研究発表が生まれた。

13年には、文部科学省の「革新的イノベーション創出プログラム(COIE)」にも採択され、16年の科学技術振興機構の中間評価では医療・健康分野で唯一の「最高評価S」を獲得した。

いづれも医療の分野では、岩木に行けば、健康に関する宝の山がある」と知られるようになった。ヘルスケアに力を入れた大手企業も続々と参画し、健診当日は全国から駆け付けてスタップとして働く。健診を受け

る側だった地域の人々も、中路特任教授らの熱意を受け止め、「健康増進リーダー」などの形で加わっている。また弘前大学は、医学部のみならず、ほぼ全学部から、教職員と学生が集まり汗を流す。

「岩木健診は授業の一環ではあるのですが、学生には単位を取る以上の学びがあります」と、中路特任教授は言う。何を学ぶかはそれぞれだ。ある学生は最新の医療機器に触れる。

## 2017 国公立大学 進学のおすすめ BUILD YOUR FUTURE

# 「短命県」の汚名返上 最先端の研究を地域へ

すのだ。調査項目は二千万項目(17年度)にも及ぶ。

受診者は事前に15ページの生活調査アンケートを記入し、健診当日は血液、尿、唾液、嗅覚、聴覚、記憶力、運動機能など40を超える検査コースを回る。所要時間は、1人平均5〜7時間。大変な健診だが、参加者の多くはリピーターとなっている。

「健康増進リーダー」などの形で加わっている。また弘前大学は、医学部のみならず、ほぼ全学部から、教職員と学生が集まり汗を流す。



骨密度検査は、医学部保健学科の学生が担当

## Campus Topics

### 1 若き日の太宰治が書いたノートが残る 弘前大学資料館

「弘前大学、過去から明日へ」をテーマに、2012年に開館した弘前大学資料館。弘前大学の歴史や最新研究などの興味深い展示のほかに、作家・太宰治(本名・津島修治)の若かりし日の素顔に触れることができる。太宰は弘前大学の前身、旧制弘前高校の卒業生だ。資料館には、講義内容を書き留めた「太宰治自筆ノート」(展示品はレプリカ)や、17歳の太宰の顔写真(昭和2年の入学者アルバムから発見)などが展示され、太宰の一面をみることが出来る。



ノートに描かれた落書きは太宰治の自画像

### 2 世界遺産のブナ林に保存・研究の拠点 「白神自然観察園」

1993年に世界自然遺産に登録された白神山。ブナの天然林をはじめとする多彩な植生で知られ、クマゲラやイヌワシ、ツキノワグマといった貴重な動物たちの生息地でもある。2010年、弘前大学はここに「弘前大学白神自然観察園」を設立した。温暖化で生態系の変化が懸念されるなか、白神山の動植物を研究し、保存活動を進める一方で、観察園は地域に開放して現地で活動する研究者をサポートする。大学教員による春と秋の自然観察会も人気だ。



ブナの森に立つ白神自然観察園

### 3 大学の授業って? 高大連携公開講座で大学生活を先取り

高校生のために「模擬授業」を行う大学は少なくないが、多くの場合は1日程度の体験授業だ。しかし弘前大学の「高大連携公開講座」は、半年もしくは通年授業を、大学生とともに受講する。夕方一部の授業に限定されるものの、単位の取得も可能だ。希望すれば将来、弘前大学に入学したあかつきに、既修得単位として認められるという。対象は弘前市内の七つの高校の生徒。大学という未知の世界を身近に感じ、学問に触れながら将来を考えるチャンスになるに違いない。



終了時には「修了証書」が交付される

### President's voice 学長の声

## 地域を幸福にする 世界レベルの研究を続ける



佐藤 敬 学長

弘前大学は、地域とともにある大学です。私はそれを誇りに思っています。

2年前、文部科学省主導で全国の国立大学の3類型化が始まりました。一つ目は「世界レベルの教育研究を推進する大学」、二つ目は「特徴的な教育研究を推進する大学」、そして三つ目は「地域の活性化に貢献する大学」です。

我々は迷わず三つ目を選択しました。本学は以前から、地域との連携により世界レベルの研究を目指してきましたが、

それはノーベル賞を受賞する研究とは別の大きな価値があると信じています。

とはいえ、我々のまなざしは地元だけに向けられているわけではありませぬ。学生の約6割が県外出身者ですから、卒業後に青森を離れる人も多くいます。しかし、この地で現実社会の課題と向き合った経験は、世界中のどの地域でも通用します。グローバル社会でも必ず役立つ普遍的なものなのです。

弘前大学の学生たちは、非常に元気で

アクティブです。本学では、サーモンの養殖「地熱発電の研究」「白神山地区の研究」などを産官学共同で進めています。が、学生たちはそこに飛び込み、地域のひと々と寝食をともにしながら研究しています。サークル活動も盛んで、地域のイベントで巨大なアップルパイを焼いたり、60〜70人規模で津軽三味線を演奏したりと、青森ライフを満喫しているパワフルな学生が多いと感じます。

本学のある弘前市は、城下町としての

歴史と風情があり、しかも生活費は破格の安さ(笑)。学びの場として、これほどふさわしい街はないでしょう。

とはいえ、受験生諸君にはじっくりと「大学でどんな学問をしたいか」を考えてほしいと思います。それを知るための手段の一つが受験勉強です。目の前のテキストこそ、大学へと続く「学問」の入り口なのです。あと半年、受験勉強を通じて「学問」を身に付けてください。弘前大学はそんな学生を待っています。